

第2回京都市美術館評議員会「将来構想検討委員会」 摘録

日 時：平成25年9月5日（木）午後2時～午後4時

場 所：京都市美術館2階応接室

出 席：上村 淳之委員、太田垣 實委員、梶谷 宣子委員、加須屋 明子委員、
倉森 京子委員、高橋 信也委員、福本 双紅委員、松尾 恵委員、蓑 豊委員、
奥 美里委員（文化芸術担当局長）、潮江 宏三副委員長（館長）
（欠席）内山 武夫委員長、川嶋 啓子委員、建畠 哲委員、布垣 豊委員、
細見 良行委員、門内 輝行委員

事務局：森川 佳昭文化芸術都市推進室長、鋒山 隆美術館副館長 ほか

1. 開 会

2. 挨 拶

潮江 宏三副委員長（内山委員長欠席のため）

3. 前回欠席委員自己紹介

加須屋 明子委員

4. 議 事

（1）第1回検討委員会の整理・確認（事務局総務課長説明）

○目指すべき方向性まとめ

- ①京都の今に立ち会い、歴史を紡いでいく京都の文化芸術の中核となる美術館
- ②幅広い世代が集う美術館
- ③ゆったり滞在し、ゆっくり楽しめる美術館
- ④文化ゾーンとしての岡崎地域の集客とクオリティを高める美術館

○展覧会の在り方まとめ

- ①京都（京都画壇・工芸）を主軸とした常設展示の実現に取り組むべきである
- ②企画力を駆使した主催展（自主企画展）を開催、強化すべきである
- ③京都の「今」に立ち会い、現代美術（コンテンポラリー）を収蔵・展示・発信すべきである
- ④魅力ある大規模な海外店・全国巡回展等を誘致する
- ⑤別館に特色・専門性を持たせる

◇ 総合美術館を目指す

（2）コレクションの在り方について（事務局学芸課長説明）

（3）普及教育・研究活動と組織体制について（事務局学芸課長説明）

5. 閉会挨拶（奥美里文化芸術担当局長）

＜議題別整理＞

1 前回の整理・確認（目指すべき方向性について・展覧会の在り方について）

- ・これがすべて満たせば素晴らしいものになる。実際はどれかを優先することになるだろう。コントロールしながら進めてほしい。岡崎全体が静かで味わいがあり満たされる空間になることを望む。芸術文化都市・京都に相応しいものにしてほしい。
- ・静かもいいが、どちらかと言えば緑が多く、花がある場であってほしい。人々が常に交流し賑わい、集まる空間に、京都の誇る美術作品が並ぶというような、そういう美術館がよい。岡崎全体がそうした空間であってほしい。
- ・すべてが盛り込まれていて方向は理想的だが、何を指すかについてはもう少し具体的なものがいい。素晴らしい建物を活用した上で、若者がもっと集まりやすい、もう少し現代的なものをするほうがよい。具体的には知らないが、今は規制があって、使いにくいという声も聞く。せつかくのこの建物や近美などの周辺のエリア環境を活かしきれていないのではないか。難しい部分をクリアし、アートプロジェクトを企画してほしい。
- ・第1回が終わった時は現代美術（コンテンポラリー）のスペースを設けるなどハード面でも、もう少し踏み込んだ方向性が出たようにイメージしていた。このまとめならば、今のままでもできる気がする。今年度の検討ではハード面に踏み込まないということであれば、とりあえず、これでいいのかもしれないが。
- ・近美と市美では何か仕分けがあるのか。過去と現在はあっても未来を感じさせるものがない。現代美術展示への要望は京都でも多いはず。市美の施設は天井も高く、現代作品を並べることもできる。今の設備や作家では展覧会をやらないであろう。ぜひ現代美術を展示する美術館が京都にほしい。

2 コレクションの在り方について

- ・正直現状はちょっと寂しい。寄贈が多いが、企業基金がない。収益を上げられるような展覧会をする。黒字になればそれを市の一般収入にするのではなく、購入費として使わせてもらえるようにするなど、いろいろなやり方はあるが、まずは市がもっと購入予算をつけるべきだ。しかし購入予算が無いなかで、これだけのコレクション形成ができたのは、寄贈があったからだろうが、兵庫県立美術館も県から購入予算を一銭ももらってなくても、30年以上、伊藤ハムの財団の基金で寄贈を受けている。京都には他所にない産業もあり優秀な企業も多いのだから、民間で基金を積んで作品を購入し、美術館に寄付してもらえるように、市も美術館も運動すべきだ。頑張って魅力のある美術館にすれば、企業もその気になってくれるだろう。
- ・美術館の「顔」になるような作品がある、作家がある、というのは大事なことから、常設展をやってほしい。向かいの国立京近美とで棲み分けができて、この美術館の特徴をはっきりと打ち出した方がよい。

- ・コレクションの内容や方針の検討もさることながら、コレクション形成のための資金調達ということになると、このあと議論される組織体制の問題も関係してくる。高い使命感を持った資金調達スタッフが1、2名でも常にいて、お金のことを考えていく必要がある。ロンドンのロイヤルアカデミーでもサマーエキジビションと称して、スクールを出た人から作品を協賛してもらい、夏の間それを展示して売るということをやっている。また、企業スポンサーの会費の使途を作品購入に限り、美術館施設の中でディナー・パーティ、カクテル・パーティを開催することと込みで設定するといった仕組みを作るなど、ミュージアムショップ、レストランを含め、トータルして多角的にマネジメントして、運営していく仕組みが必要になる。
- ・個人、企業からの教育、医療、福祉機関への寄付金は、理路当然である税制互恵措置とそれに伴う簡易申告手段があれば必ず集る。寄付は、米国のような税制上の優遇措置がなければ絶対に進まない。お金を納める人は自分か望むところでお金を使って欲しいと思っている。寄付の対象を特定して所得から直接引いてもらうということができればよい。企業からも継続してスポンサーになってもらうための仕組みが必要だ。昔は納税者がほんの一握りと少なかった歴史があったが、戦後、豊かな国となった日本では、全国民が納税者になり、経済先進国となった。今の経済環境下では、行政が、公共／NPOに準じた教育、医療、福祉機関の財政を主として市民の寄付に頼り、市からの公金歳出を減らし、市民が自から選択した寄付先にもっともっと興味を持って支援できる仕組みにすれば、日本の経済、文化の活性が図れる。
- ・コレクションは、従来の流れを追って、それに足りないところを補うことも大事だが、美術館の重要な仕事のひとつとして、新しい展覧会を企画する活動があつて、それに付随してコレクションが形成されるという流れが理想だ。この美術館ではこれまで自主企画をあまりやれなかったもので、そういう方法でのコレクション形成が出来なかったように思う。特に現代美術の場合、企画展をやりコレクションを作っていくと、館の特色が出てきて、発信力も出る。
- ・足りないものは全部購入しなければならないと考えるのではなく、作品を持っている人と緩やかなネットワークを形成する、という方向で考えた方が現実的だ。
- ・購入予算の配分として、現代美術と他とのバランスを考えるべきだ。現代美術はそれほど金はかからない。90年代の作家のコレクションとして一番まとまっているのが、高橋コレクションであるが、これは個人の医者コレクションである。日本の自治体に購入予算がなかったということもあるが、これだけ日本のアートが国際的に注目される中で、代表的なコレクションはほとんど個人の力によって賄われているのは残念だ。その個人の医者も、沢山お金を使って集めたというのではなく、その時その時にちゃんと見て、良いものをそのときの値段で買っただけである。さきほど言われたように、現代美術に視野を向けた企画展をやるということと、現代美術のプライマリーギャラリーがあることと作家が育ち、コレクションが形成される

ということが有機的に繋がるのが本来の在り方だろう。京都には、そういう土壤があるような気がする。

- ・おっしゃるように、現代美術をコレクションするには、けっして巨額なお金が必要なのではない。コンテンポラリーがないと歴史が繋がらない。ただし、現代美術は収蔵が難しい。現場で制作されたものが美術館の収蔵庫に収まるかどうか。巨大なインスタレーションなどは壊してしまうと元の形が残らないので、解体してセットにしてパッケージして、取扱説明書をつけて、地元のほか何ヶ所かに残しておかなければならない。民間ギャラリーでは十分支えきれない。それが未来を切り開くという価値付けをして、美術館で購入・収蔵し、支えてもらえればと思う。
- ・美術館が良い展覧会をやれば、必ず良いことが起こる。いろいろな人が見ているわけだから、自分が持っているものを並べて欲しいな、と思わせる。そうでなければコレクションは増えない。人は、誰も入らないような美術館に、お金を費やして寄付はしない。美術館が良い展覧会を企画実行することが最も大事だ。
- ・ほかの美術館の収蔵庫をみたわけではないが、ここの収蔵庫は小さいのではないか。大きなインスタレーションも収蔵できるようにしてほしい。将来の評価の定まらない現代美術の収集に関しては難しいことも多いだろうが、スペースと人材を確保して、現代アートを充実し、市美の特徴としていただきたい。

3 普及教育・研究活動について及び運営体制について

- ・この大きな建物で、これだけの展覧会をやっている、職員が全部で10人というのは考えられない。小さな町のような。京都市の規模や市が運営する美術館に相応しい職員数として、責を全うするべきだ。ただ展覧会をやるだけではなく、人が集い、音楽会や映画などを含めて普及活動をするにはやはりもっとスタッフが必要だ。美術館の存在の重要性を市に訴えていく必要がある。広報も大事な部門だ（金沢21世紀美術館には5人いる）。今の現状は教育専門・交流活動が全然できていない。事の重要性を市に訴えるべきだ。美術館が収益を上げられるような体制・システムをとれば、市もお金をつけるのではないか。しかし、それをするためにはやはりもっと人が要る。
- ・広報と教育プログラムと協賛獲得のためのスタッフは絶対に必要だ。当館にとって価値ある美術はこれだとお客に売り込むためには、学芸の立場からオーディエンスに対して、向こうの立場や眼で、広報の立場から、教育の立場から、協賛獲得活動の立場からトンネルを掘る、道筋を作る、というふうにいっつも立場・方向から考えなければうまくいかない。特に協賛獲得は企業を巻き込むことが必要。企業がお金を出す費目は広報予算か福利厚生予算であり、例えば、福利厚生予算で出す企業は、展示内容ではなく、教育プログラムなら出したりする。広報に関しては、ウェブを含めて手法が最近非常に変わっているから、あらゆるメディア、手法を意識

し、それに対応できる能力を持った若いスタッフが必要だ。

- 大学でアートマネジメントを学ぶなどした人たちは、鑑賞者の第一線にいる。こういう人をインターンとして受け入れ、養成したらどうか。芸術活動は社会活動であり、普及プログラムに入れ、作り手と受け手と送り手が合体することで成り立つのだ、と現場でわかれば、よい鑑賞者を育てることにもなると、総合的に組み込んでいければよいのではないか。
- 国立国際美術館では、インターンを受け入れている。非常勤としてインターンや学生ボランティアには普及活動に従事してもらえばよいと思う。その間学芸員は本来の仕事ができる。その人たちを動かすための専門の担当者を最低一人置く必要がある。そしてそのひとが普及活動をインターンと一緒に作っていくという現場を活かした仕組みづくり、体制をとるのがよい。
- 国立国際のインターンは優れている。その担当者が優れているからだ。インターンを受け入れてないのは、扱う人材がないからだ。学芸員になりたい人がたくさんいる今の機会を逃すと、良い人材はなかなか来ないと思うので、この機会にインターン制度をとることを提案したい。
- 兵庫県立では、10年先を考えて、今、私と安藤忠雄さんと30代のサラリーマン150人を対象に、塾を開いている。この館でも館長が若者を育てるということをぜひやられるといい。
- 何のためにその人を雇うか。マッチングが重要だ。1人の募集の枠に30から40人が応募してくる。企画力や2~3年先のプロジェクトに適しているかどうかなど、選ぶ基準があるが、いずれもモチベーションが高い。普及・映像のインターンもいる。ある部分任せてしまう。そうすることで、インターンも業績ができ、うまく組み込み互いにメリットがある。学芸員プラスインターンで1セットの企画を練ることができる。
- うちの美術館でも必ずサブをつける。インターンを取る仕組みが必要だ。
- まずスタッフの人員を増やしてから、インターン制はやるべきだ。
- 議会の美術館に関する答弁で、私が出るようになると、話が通るようになった。専門家が答弁すると議員も熱心に聞く。そういう時には館長がえられるようなシステムを作られるとよい。
- 議会での答弁は館長ではなく、行政の事務方の私がしている。議会には委員会があり、美術館も担当している。議員の方々たちは美術館に見学に来て館長の話聞くなど、非常に熱心である。京都市美術館は80周年で、この素晴らしい建物を再整備してどう活用していくかということが課題である。その前に今年度は、美術館の中味の活動をどうして魅力的なものにしていくか、運営組織をどうしていくのかについて、この会議でお知恵を出していただいている。どこの自治体も厳しいが、特に京都市は財政状況が苦しく、その中で様々の文化施設を再整備していかななくてはな

らないので苦勞をしている。今日は、美術館の財源確保に関して、ファンド・レイジングのことや、企業のご寄付をどう得ていくかについて、民間資金調達の手法や、そのためのスタッフの必要性など教えていただき大変参考になった。今後更に検討していきたい。京都会館もローム株式会社からネーミングライツということで、改築のための資金提供を受けた。税制は国の問題なので如何ともできないが、寄付をされる企業にとっても何か魅力になるようなことを、知恵を絞らなければならないと思っている。美術館だけでなく、岡崎地域は京都を代表する文化交流ゾーンであり、文化的環境を整えていきたいと考えている。

- 京都会館はネーミングライツ制を取られたということだが、私立財団のメトロポリタン美術館をはじめ、アメリカでは、永久的な建物の命名に使うのは、寄付企業の創始者や寄付者など個人の名前でのみとしている。特別展・常設展など、一時的な企画には使ってよいが、京都市立の美術館が、その永久的な建物の名前に企業の商標を使用して、出すのはよくないと考えられるので、それは申し上げておきたい。